

## マルグリット・ポレートの自然本性概念について

村 上 寛

### 序

従来の自然（natura）概念には大きく分けて二つの側面がある。その一つは外部から技術によって製作されたのではない、それ自らにおいて自己生成的に成長するもの、成長したもののとしての側面であり、もう一つはある事物をそのものたらしめている本質としての側面である。そのような理解を踏まえつつ、中世キリスト教世界では「無からの創造（creatio ex nihilo）」という教説との関連から、被造物としての自然が、そしてまた被造物である自然としての本質が自然本性を巡る問いとして立てられたのである。被造物としての自然は無から創られたものであるがゆえに存在の根拠をそれ自身の内に持たない、塵の如きものなのだろうか。しかしまた善なる神によって無から創られた被造物である以上、その本質・本性は善なのではないのだろうか。

このような問題についてマルグリット・ポレート（-1310）はその唯一の著書『単純な魂の鏡（*Mirouer des Simples Ames*）』（以下『鏡』）の中で彼女独特の興味深い思想を展開している。本論考では一見しただけでは矛盾していると思えないほどに錯綜しているポレートの自然本性概念について、自然本性概念と密接な関わりを持つ三つの死について確認しつつ、明らかにしていきたい。

### I. 外的自然

自然本性について、ポレートは肉の本性と精神の本性という二つの区別をしている。だが肉の本性が否定され、精神の本性が肯定されるという単純な図式ではない。ポレートはそれぞれをある側面においては肯定的に捉え、ある側面においては否定的に捉えるのである。そこでまずは肉の本性がいかなる意味内容を持ち、いかなる意味において肯定され、否定されるのかについて確認したい。

肉と精神という区分において肉が意味するところは自然本性概念が持つ二つの側面に即して言えば、外部からの操作によらず生成、生長したもの、すなわち現代的な言葉で言えば自然科学が対象とする自然一般のことであると思われる。つまり肉の自然本性とは肉体を含めた外的な被造

的自然のことであると言えるだろう。ではそのような外的自然について正統的なキリスト教神学はどのような評価を与えているのだろうか。

旧約聖書における「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。(創世記1; 28)」が端的に表すように、外的な自然は神によって人間に与えられた、人間が支配すべき対象である。

サン＝ヴィクトルのフーゴー (Hugo de Sancto Victore, ca.1096-1141) は『魂の身請け金について (De arrha animae)』の中でそのような自然が、花婿であるキリストが花嫁である魂に与えた「身請け金 (arrha)」であると述べている。

全自然はあなた (魂) への従順のためにあなたに仕え、あなたへの利益のためにあなたに奉仕し、あなたの娯楽と等しく必要なもののために、尽きることのない豊かさに従って生じるという目的に、それ自身の進み行く道を定めている<sup>(1)</sup>。

このように自然が人間に仕えるべく、ひいては正当な権利として人間が自然を利用すべきことが述べられているが、それは「創造主の人間に対する特別の愛があり、その愛において人間は、他の被造物に比べてより高い栄光を与えられている」<sup>(2)</sup> からであるとされている。トマス・アクィナス (Thomas Aquinas, ca.1225-1274) も言うように、神は創造において各々の存在について秩序を定めたのであり、人間は神の似姿を持つがゆえに被造的な外的自然よりも上位に置かれた存在なのである<sup>(3)</sup>。

但し外的な自然はあくまで贈り物であり、贈り主ではなく贈り物それ自体をより愛することをフーゴーは戒めている。自然を求め支配し、利用することは罪ではないが、それを贈り主である神よりも愛し求めることは裏切りであり、娼婦 (meretrix) と呼ばれることになるのである<sup>(4)</sup>。

このようにフーゴーをはじめとした正統思想において人間は外的自然とは区別された対象であるが、ボレートにおいてもそれは同様である。但しボレートにおいて特徴的であるのは、外的な被造的な自然という意味で用いられる自然 (natura) がほとんど肉体と同義語であるという点である。これらのことは次の一文が明らかに示している。

誰が、自らが必要とする四大、すなわち天の光、火の熱、水の潤い、そして私たちを養う大地を受け取ることをためらうべきなのでしょう？ 私たちは理性の非難なしに、四大の奉仕を自然が必要とするあらゆる方法において受け取っています<sup>(5)</sup>。

四大、すなわち外的自然の奉仕を自然、すなわち肉体が受け取るのである。フーゴーの場合自然が魂、つまり人間に仕えるという構造であったが、ボレートの場合外的自然であるところの四

大が、肉体であるところの自然に仕えるという構造になっているのである。

このような意味において言われる肉の自然は本来的には善である。というのも、「精神は神によって創られ、肉体は神によって形作られた<sup>(6)</sup>」のであり、「それゆえにそれら二つの本性は、それら二つの本性を作った神的正当性のゆえに善」<sup>(7)</sup> だからである。ボレートは外的な被造的自然を人間の下位にみなすというキリスト教における伝統的な価値観を否定し、外的自然に肉体を含めることで、神による創造を根拠として、肉体及び外的自然の積極的な肯定を意図したのである。

そしてまたこのことは理性優位の思潮に対する感官の再評価でもある。ボレートは理性に従い、徳の名の下に肉体を抑制する人々と、滅却された魂に相当する自由な人々を比べて次のように述べている。

自由な魂とは反対に、私たちが精神の生と呼んでいる、私たちが話しているこの生は、常に肉体がその意志に反することを行っていないと平和を保有することが出来ないのです。それはそのような人々が感官（sensualiute）に反したことを行っているということであり、もし彼らが自らの喜びに反して生きていないのであれば、彼らはそのような生の破滅に陥るでしょう。そして自由な人々は全く反対のことを行うのです<sup>(8)</sup>。

肉体との関連で「感官に反し」、「喜びに反し」とあるように、ここでは身体的な快や楽を否定する人々が自由な人々と対置されている。しかしこのことは肉体に関連する快や楽の積極的な推奨を意味しているのではない。精神の生を生きる人々が肉体を含めた外的自然をないがしろにすることを批判しているのである。

しかしこのような肉体の肯定及び再評価の一方で、肉体は粗野な（gros）ものでもあるとされている。「アダムの子による養育のために、肉体は過ちによって弱く、惑わされている」<sup>(9)</sup> からである。肉体は本来善であるはずだから「肉体の粗野さは神的働きによって取り去られ、和らげられる」<sup>(10)</sup> 必要があるが、そのためには外的な意欲を捨て去ることで肉の生から精神の生に移るべきであるとされるのであり、そのことが次のように言われるのである。

むしろ私はあなたがたにこのように言うことが出来るのです、と自由なる魂は言う、人はそこ（精神の生）に至る前に、その意欲に反することを完全に行い、満ちるまで諸徳を養っているべきであり、精神が日々対立なしに支配するために、間違いなく自らをしっかりと保っているべきなのです<sup>11</sup>。

このように外的な自然への意欲を捨て去り、精神が支配するようになると肉体にまつわる自然

本性の「病的気質 (le humeur de maladie)」が破壊されるとされる。そして人は自然本性の生から精神の生へと移ることになるが、先ほどの引用箇所では精神の生が自由な人々と対置されていたように、人は精神の生をもまた死ななければならない。これがボレートの言う自由にして滅却した生に達する前に死ぬべき三つの死の内の二つ、自然本性の死と精神の死である。

しかし先の肉体及び外的自然の積極的な肯定とこのような肉体及び外的自然への意欲の否定はどのような関係にあるのだろうか。そのことは三つの死とその順序に深く関わっている。

## Ⅱ. 三つの死

自由にして滅却した生に達する前に死ぬべき三つの死とは、罪の死、自然本性の死、霊の死の三つである。何故それらの死が必要なのだろうか。また死とは何を意味するのだろうか。三つの死を死んだ人の生とはどのようなものなのだろうか。以下それぞれの死について順番に確認し、その必要性と死が意味するところを明らかにしたい。

罪の死とは「神が法において禁じる如何なる事物の色も味も香りも自らの内に留まることがないように」<sup>12)</sup> 死ぬことであると言われている。つまり神が禁じる事柄について一切関わらないようになるということであるが、しかしそのような生は規定された罪を避け、命じられたことだけを為すという非主体的な生に過ぎず、ボレートの目指す自由な生とはほど遠いものである。

自由な生に達するために必要な二つ目の死が自然本性の死である。前節までに詳しく見てきたように、自然本性の死とは、特に肉体のことを意識した自然について、それにまつわる弱さ、下品さを取り除くことを意味している。そのために肉体にまつわる意欲を抑制し、諸徳に従うことが望まれるが、肉体の弱さ、粗野さの除去はそのような人間側の努力によってのみ達成されるものではない。「肉体の粗野さは神的働きによって取り去られ、和らげられる」<sup>13)</sup> のである。

かくして肉体の粗野さが取り除かれ、精神が支配するようになった人間は精神の生を生きるようになるが、この精神の生を死ぬことが、三つ目の精神の死である。しかし何故精神の死が必要なのだろうか。前節で見たように、粗野さを取り除かれたはずの肉体を精神の生は抑制するが、ボレートの目指す自由な生を生きる人々はその反対のことを行うのである。

自然本性の死が肉による支配の否定であったのに対して、先の引用文が示すのはつまり精神による支配の否定である。そしてこれらの死によって肉による支配も精神による支配も受けなくなった人々が自由な人々と呼ばれるのであり、そのような人々の生が「神的生」と呼ばれるのである。

「精神の死」に精神による支配を否定する目的があることは分かったが、そのような精神の支配が否定される理由が単なる肉の肯定でないこともまたこれまでの考察から明かである。そこで次節ではボレートの精神概念について考察し、精神の死が必要とされる理由を明らかにしたい。

### Ⅲ. 内的自然

前節までに確認したように、ボレーにおいて精神は人間が持つ二つの本性の一つでもあり、自然本性の死と精神の死と言われるように、自然本性と区別されたものでもあった。このことは自然本性という語が、狭義の意味において特に肉体を意味するからであることもすでに確認した。従って肉体を外的本性とするなら、精神は内的本性にあたることになるだろう。

内的本性であるところの精神は理性であり情動であり、より正確に言えばそれらの根拠である。広義の意味において自然本性であるところの精神が、狭義の意味において理性であることは次のような一節から明かである。

そして理性は魂に、死ぬまで不平を言うことなく、諸徳が推奨しようとしている全てのことを魂がすべきであると常に言っていたのです。それゆえ理性と他の諸徳たちはこの魂の女主人だったのであり、この魂は精神の生を生きようとしていたので、魂は彼女たち（理性や諸徳）が推奨しようとする全てのことに真実従っていたのです<sup>(14)</sup>。

このように理性が推奨する諸徳、すなわち快や楽の否定、肉体の抑制はまさに精神の生に対応するものである。理性が魂の女主人であったと言われているように、理性が支配的な役割を果たす生が精神の生であるとも言えるだろう。

情動と精神の関係はよりはっきりと語られている。次の引用は減却された自由な魂との対比において語られているものである。

しかし自然本性の大いなる感覚によって欺かれている人々は、自分自身によって自分自身に満足する（contentando）精神の生の情動によって自分自身を支配することを委ねているのであり、それは彼らから根底を奪い去っているのです<sup>(15)</sup>。

精神の生の情動と言われているように、精神の生では単に理性が支配するのみならず、情動もまたその人自身を支配するのである。そしてその支配は、その人を欺き、騙すものであるとされる。欺き、騙すとは何を意味しているのだろうか。次の引用が示すように、情動が欺くのは情動が向かうその対象についてである。

というのも、精神の情動を少しでも持っている人は誰もが彷徨っているのですから。そしてそれらの考えは、魂が自分自身に対して持っている愛の優しさの情動を通じて、精神の生の内にあるのです。しかしその魂が持っている、その魂が患っているこの愛が神に向かって

いるということをその魂は信じています。しかしよく理解されるべきなのですが、その魂は知らずに、気付くことなしに自分自身を愛しているのです。すなわち情動の優しさによって愛する人々は騙されているのであり、それは彼らを知識に到達させることがないのです<sup>16)</sup>。

精神の生において人は理性だけではなく情動によって支配されるが、その情動は実のところ自分自身を愛しているにすぎないのに、神を愛していると思わせるのである。

ここまで見てきた理性と情動が支配する精神の生とは、つまり戒律や徳目に従ってさえいけば神に向かっていると考えるような、否定的な意味における修道院的な生のことである。肉にまつわる罪を可能な限り避け、神を愛し、神に仕える生を、ポレートは理性や諸徳によって必要以上に肉体を抑制し、神を愛する自分自身を愛する生と見なすのである。

かくして精神であるところの、従って自然本性であるところの理性と情動の支配が否定されることが明らかになったが、肉と同様に精神も「神に創られたがゆえに善」なるものではなかったのだろうか。

ポレートはこのような精神である内的本性について二つの側面を設定する。「二つの自然本性についての認識、すなわち神的善とその（魂の）悪」<sup>(17)</sup> である。理性と情動による支配はその魂に固有の本性に由来するがゆえに悪なのである。だが何故固有の本性が悪なのだろうか。「その本性は本性に傾向付けられている無への傾向性のゆえに悪」<sup>(18)</sup> だからである。何故無への傾向があるのだろうか。無から創造されたからである。何故無への傾向が悪なのだろうか。神が存在で、被造物は無であるために、無への傾向とは無なるものである被造物への傾向に他ならないからである。

今や固有の本性であるところの精神の死が必要であることは明白である。そしてこの精神の死は意志の死によって完成する。

何故なら、と愛は言う、精神は精神の意志で全く満たされており、そして誰も何らかの意志を持っている間は神的生によって生きることが出来ませんし、もし意志を消し去ったのでなければ、満足することもないのです。精神はその愛の感覚を消し去るまで、そしてそれに生を与えている意志が死ぬまで、完全に死にません。そしてこの消滅の内ではその意欲は神的喜びで満足することによって、完全に満たされるのです。そして常に自由であるか栄光ある、上質な生はそのような死の内では生じてくるのです<sup>(19)</sup>。

精神の意志とは何だろうか。精神は広義の意味で内的な自然本性であり、狭義の意味で理性や情動であった。この箇所では「精神はその愛の感覚を消し去るまで、そしてそれに生命を与えている意志が死ぬまで、完全に死にません」と言われているように、意志は情動に生を与える、つ

まり固有の本性であるところの精神の生を現に働きとしてあらしめる根拠なのである。

従って、「死」が意味するところも今やまた明白である。ボレーが「自然本性の死」や「精神の死」という言葉で意図しているのは肉と精神それぞれのある側面についての否定であり、本質としての自然本性そのものや、内的な能力や精神活動全体の破壊を意図しているわけではないのである。

かくして戒律に従うだけの生を越え、肉体の粗野さ、弱さを取り除かれ、理性や情動による支配を越えた魂は今や滅却された魂、自由な魂と呼ばれる。滅却された魂はもはや二つの自然本性を気にしない。それに対して、未だ彷徨い欺かれている魂、すなわち未だ三つの死を死んでいない魂は次のように言う。

真実、とこの魂は言う、私の肉体は弱く、私の魂は不安なのです。というのも、私が望むと望まざるとに関わらず、自由な人々は持っておらず、持つこともあり得ないその二つの本性をしばしば私は気にかけているのです<sup>30)</sup>。

この引用箇所で重要なのは、自由な人々がその二つの本性を持っておらず、持つこともありえないと言われていることである。前節までの考察から「自然本性を持っていない」ことの意味は明かである。すなわち、自由な人々はその固有の外的本性及び固有の内的本性を持っていないのである。そして固有の本性として持っていないことで、神によって創られたがゆえに善であるところの自然本性を「気にしない」のである。

固有の本性を持たず、神によって創られた自然本性を気にしないなら、その時魂の内には何があるのだろうか。「そのような存在は二つの本性の内に、一つの愛、一つの意志、一つの働きを持つ」<sup>(21)</sup>のである。すなわちそのような魂は固有の自然本性を持ってはいないが、人間である限りにおいて備わっている自然本性の内に、固有性を脱却した一つの愛、一つの意志を持つのである。何故愛であり、意志なのだろうか。自由意志 (liberum arbitrium) は創られたものではなく、自然に生じてくるものでもなく、神によって与えられたものだからである。

## 結語

ここまでマルグリット・ボレーの自然本性概念について、三つの死という概念を軸にしつつ考察してきた。ボレーの自然本性概念は、同じ自然本性という言葉が文脈によって外的本性であったり内的本性の意味であったりする上に、固有の本性と神に由来する善なる本性という二つの層が存在するなど、非常に理解しづらいものとなっている。このことはキリスト教における自然本性概念にまつわる問題を如実に反映しているように思われる。すなわち、神によって創られた自然本性が本来的には善であるはずであるという観念と、被造物にすぎない自然本性が神に比

して無価値なものにすぎず、ひいてはそれへの指向性が悪であるという観念である。

ポレートがこのような問題に対して出した答えは次のようなものである。すなわち、被造物が神に比して無価値であることを認めつつ、被造的本性が持つ被造的・自然へのあらゆる指向性を否定するのではなく、被造的な世界の内・中で形成され培われてきた固有の本性に基づいた自然への指向性こそが悪であると見なすのである。

三つの死を死んだ魂がどのようなものであるのか、特にその「一つの意志」がどのようなものであるのかということは、固有の本性の否定ということからして考察されるべき問題であるとは思われるが、そのような問題についてはまた改めて論じる機会を持ちたい。

#### 注

- (1) “Omnis natura ad hunc finem cursum suum dirigit ut obsequiis tuis famuletur et utilitati deserviat, tuisque oblectamentis pariter et necessitatibus secundum affluentiam indeficientem occurrat.”, Hugo de Sancto Victore, *De arrha animae: L'oeuvre de Hugues de Saint-Victor*, Brepols, 1997. p. 234.
- (2) “Est igitur specialis quidam amor Creatoris ad homines, in quo quidem ipsi homines aliis creaturis, non autem ad inuicem, omplius gloriari habent.”, *ibid.*, p. 242.
- (3) Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, I, q. 47, a. 2; q. 23, a. 5.
- (4) “Caue, o anima, ne, quod absit! non sponsa sed meretrix dicaris, si munera dantis plus quam amantis affectum diligis. (魂よ、用心しなさい、愛する人の愛情よりも与えてくれる人の贈り物のほうをより愛し、花嫁とではなく、娼婦と呼ばれることがないように。)” *ibid.*, pp. 236-238.
- (5) “Qui est celuy qui doie faire conscience de prendre son besoing des .iiij. elemens, comme de la clarte du ciel, de la chalour du feu, de la rousee de l’eau, et de la terre qui nous soustient? Nous prenons le service de ces .iiij. elemens en toutes les manieres que Nature en a besoing, sans reprouche de Raison; / Quis enim facit conscientiam recipere suam necessitatem de quattuor elementis, sicut de claritate aëris, de calore ignis, et de aqua et de terra? Nos accipimus ab istis quattuor elementis seruitia omnibus illis modis, quibus natura indiget absque redargutione rationis.”, Margaretae Porete, *Speculum simplicium animarum* / cura et studio Paul Verdeyen, TBrepols, 1986, cap. 17, linea 41.
- (6) “L’esperit est de Dieu creez, et le corps est de Dieu formez. / Spiritus est a Deo creatus et corpus est a Deo formatum.” *ibid.*, cap. 102, linea 8.
- (7) “Et pource sont bonnes ces deux natures de la divine droiture qui a fait ces deux natures, / Et sunt bonae istae duae naturae diuina iustitia, quae fecit ipsas.” *ibid.*, linea 11.
- (8) “Par le contraire de l’Ame Enfranchie, la vie dont nous avons parlé, que nous appellons vie d’esperit. ne peut avoir paix, se le corps ne fait tousjours le contraire de sa volenté; c’est a entendre, que telles gens font le contraire de la sensualité. ou aultrement ilz rencherroient en perdicion de telle vie, se ilz ne vivoient au contraire de leur plaisance. / Nunc dicam uobis contrarium de anima libera. Vita de qua locuti sumus, quam uitam spiritus uocamus, non potest habere pacem, nisi corpus continue faciat contrarium sui appetitus. Hoc est dictum quod tales qui uiuunt ista uita, scilicet uita spiritus, oportet quod faciant totum contrarium sensualitatis; alias enim reciderent ipsi in perdicionem talis uitae, nisi uiuerent omnino secundum contrarium propriae sensualis complacentiae. Et tamen illi qui sunt liberi totum oppositum faciunt.” *ibid.*, cap. 90, linea 24.
- (9) “par la nourriture du peché de Adam, le corps est foible et endui a deffaultes; / propter sequelam primi



- parentis corpus debile ad defectus est inclinatum.”, *ibid.*, cap. 105, linea 6.
- (10) “le gros du corps est osté et diminué par oeuvres divines. / grossities corporis est attenuata et quasi amota per opera diuina.”, *ibid.*, cap. 65, linea 31.
- (11) “Mais tant vous puis je bien dire, dit ceste Ame Franche, que il convient, ains que on y viengne, que on face parfaitement le contraire de son vouloir, en paissant les Vertuz jusques a la gorge, et se tenir ferme sans faillir, affin que l’esperit ait tousjours seigneurie sans contrarieté. / Tamen tantum uobis bene dicam, dicit haec Anima libera, quid requiratur, antequam ad hoc esse perueniatur. Oportet enim perfecte complere contrarium suae uoluntatis in pascendo uirtutes usque ad saturitatem, et tenere sensualitatem in puncto absque defectu ad hoc ut spiritus habeat semper absque repugnantia dominium.”, *ibid.*, cap. 90, linea 11.
- (12) “il ne demoure en elle ne coulour ne savour ne odour de chose nulle que Dieu deffende en la Loy, / in ea non remaneat nec color, nec odor, nec sapor alicuius rei in lege Dei prohibita.”, *ibid.*, cap. 60, linea 8.
- (13) “le gros du corps est osté et diminué par oeuvres divines. / grossities corporis est attenuata et quasi amota per opera diuina.”, *ibid.*, cap. 65, linea 31.
- (14) “laquelle Raison luy disoit tousjours qu’elle fist tout ce que les Vertuz vouloient, sans contredit jusques a la mort. Si que Raison et les aultres Vertuz estoient maistresses de ceste Ame, et ceste Ame estoit vraye obediante a tout ce qu’elles vouloient commander, pource qu’elle vouloit vivre de vie espirituelle. / tota die sibi dicebat quod faceret quicquid ei suggerebant uirtutes absque contradictione usque ad mortem. Ita quod tunc ratio et aliae uirtutes erant dominae et magistrae istius animae et ipsa erat uera oboediens ad omnia quae ei praecipere uolebant, si uolebat uiuere uita spiritali.”, *ibid.*, cap. 21, linea 26.
- (15) “(古フランス語欠損箇所) / Sed magnus sensus naturae quo decepti permittunt se regi per affectionem uitae spiritus in contentando seipsos de seipsis, aufert eis profundum,” *ibid.*, cap. 134, linea 21.
- (16) “car tous ceulx sont marriz, qui ont point d’affection d’esperit. Et ces regars sont en vie d’esperit, par affection de tendreur d’amour que l’Ame a a elle mesmes. Mais elle cuide que ce soit a Dieu que elle ait ceste amour, dont elle est si actainte; mais a bien entendre, c’est elle mesmes que elle ayme, sans son sceu et sans ce que elle s’en apparecoyve. Et la sont deceuz ceulx qui ayment, par la tendreur qu’ilz ont d’affection, qui ne les lesse point venir a cognoissance. / Quia omnes illi sunt maesti, qui aliquam affectionem spiritus habent. Et isti respectus sunt in uita spiritus, per affectionem teneritudinis amoris quem habet ad seipsam anima, licet credat quod hoc sit ad Deum, ad quem hunc habeat amorem quo est ita apprehensa. Sed bene intelligendo ipsa est quam diligit sine suo sensu. Et quam habent, quae non sinit eos ad notitiam deuenire.”, *ibid.*, cap. 133, linea 7.
- (17) “la cognoissance de ces deux natures, dont nous avons parlé, de divine Bonté et de sa mauvaistié, / notitia illorum duorum de quibus locuti sumus, scilicet diuinae bonitatis et uoluntatem,” *ibid.*, cap. 118, linea 152.
- (18) “sa nature est maligne par l’inclinacion du nient dont nature est enclinee, / natura sua est maligna propter inclinationem nichili quo natura inclinatur,” *ibid.*, cap. 118, linea 113.
- (19) “Pource, dit Amour, que l’esperit est tout rempliz d’espirituelle volenté, et nul ne peut vivre de vie diuine tant comme il ait volenté, ne auoir souffisance, se il n’a volenté perdue. Ne jusques ad ce n’est l’esperit parfaitement mort, qu’il ait perdu le sentement de son amour, et la volenté morte, qui vie luy donnoit, et en ceste perte est le vouloir parfaitement rempli par souffisance de divine plaisance. Et en telle mort croist la surmontant vie qui est tousjours ou franche ou glorieuse. / Propter hoc, ait Amor, quod spiritus est totus plenus spiritalibus uoluntatibus. Ideo non potest aliquis uiuere uita diuina, quamdiu habet uoluntatem; nec habere sufficientiam, donec perdiderit uoluntatem. Nec usque tunc est

perfecte spiritus mortuus, usque quo perdiderit omnino sentimentum sui amoris et uoluntas sit mortua, quae sibi dabat uitam; et in ista complacentiae. Et in tali morte nascitur superexcellens uita, quae semper est uel libera uel gloriosa.”, *ibid.*, cap. 73, linea 6.

- (20) “Voire, dit ceste Ame, mon corps est en foiblesse, et mon ame en crainte. Car j’ay souvent soing, dit elle, vueille ou non, de ces deux natures, que les frans n’ont mie, ne ne pevent avoir. / Verum est certe, dicit haec Anima. Corpus meum est debile et anima mea timida, quia frequenter oportet me sollicitari, dicit Ipsa, uelim nolim, de his duabus naturis de quibus liberi non sollicitantur nec sollicitari possunt.”, *ibid.*, cap. 77, linea 73.
- (21) “Et tel estre fait avoir une amour et ung vouloir et une oeuvre en deux natures. / Et istud esse facit habere unum amorem, unum uelle et unam operationem in duabus naturis.”, *ibid.*, cap. 52, linea 34.